

INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会ニュースレター

1993 12.1

23

情報知識学会事務局 発行 〒110 東京都台東区台東1-5-1 (凸版印刷株内) TEL03(3835)5692 FAX03(3835)0824 ISSN0915 1133

先ず、人と手を・・・・・・・・

日本大学芸術学部教授 木村三郎

私の専門とする西洋美術史という分野では、研究上の勝負どころは、「一に体力、二に語学・・・」という言いかたをする。海外にある美術館や研究所をおとづれながらの研究には、実際それほど、単純な意味での体力が求められ、また、一流の人たちは、数か国語で書かれた西洋の文献を読破するのが普通だからである。

しかし、筆者が、学生諸君に話をする時は少し違って、「頭よりも、先ず眼を、そして、足と手を！」ということにしている。これは、初学者の諸君たちにのっけから、数ヶ国語を読めといても始まらないし、むしろ混乱させるのが関の山だということがわかっているからである。一方で、美術史という学問が、眼による視覚上の判断力の養成が重要だということ、そして、美術館や寺院をめぐる歩くというフィールド・ワークの部分が多く持つという性格上、先ず歩き回ることには躊躇しない能力、そして、同様に大切なのが、カード作りや、図版処理という手先の訓練なのだ、ということを知ってもらいたいからである。ワープロにせよ、パソコンにせよ、手先という意味では同じである。

ところで、データ・ベースという単語が、人文科学の分野でも抵抗なく聞かれる時代に入ってきた。実際、小生なども、自宅のパソコンで、研究用のデータ・ベースにずいぶんご厄介になっている。フランス系の美術史を専攻していることもあって、フランスのデータ・ベースを使うことが多いのだが、アクセスに成功し、データを獲得しえた場合の威力たるや、やはり相当のものである。パリにある大型コンピューターに接続し、FRANCISという人文科学用データ・ベースにアクセスして、初めて、探していた貴重な資料が、なんと自分の机の横にあった雑誌の中に眠っていた！というような経験があるからでもある。コンピューター検索とは時にこんなものだろう。ところで、
(次頁へ)

目 次

先ず、人と手を・・・・・・・・	1	学会カレンダー	10
ディスプレイの文化史	3	FID 国際会議	11
参考図書としてのデータベース	4	研究集会「歴史研究と電算機利用」に参加して	12
Euro Call '93 に参加して	7	情報知識学会通信	13
1994 年情報学シンポジウム	8	HCI Bibliography Project の紹介	14

わが国には、まだ人文科学全般にわたるこうしたデータ・ベースは作成されていない。文献の収蔵機関などがわかるようになった、わが国の NACSIS などにも最近はお世話になっているのだが、美術史系に限っていえば、データ内容の水準にはまだ雲泥の相違がある。なぜなのだろうか？

このメイド・イン・フランスのデータ・ベースを活用していて、また、平行して刊行される冊子体の書誌を併用しながらいつも感じることは、この国はどこか、文化行政の基本的なところで価値観が違っているな、という印象である。データ・ベースには、無論大型コンピューターがいくつ使えるのか、とか、端末の価格と使用状況がどうなのか、といった基本的な問題がある。しかし、歴史学系データ・ベースの場合、最も重要なことは、入力すべき一次資料である文献が手の届く所に集中管理されているか、その蓄積方法が図書館学的な意味で合理的か、そして、これもまた図書館学的な意味で訓練を経た有能な入力担当者が、何人、動員できるのか、ということなのである。文化大国、そしてデータ・ベース大国フランスでは、文化の中央集権が進んだ少なくとも19世紀半ばには、データ・ベースこそなくとも、カタログ作成という意味で、すでにこうした事実に対する共通認識を、文化行政のトップ・レベルで所有していたといえるだろう。当時はその作業をカードという手作業で実践していた。20世紀末は単に、それをメカでやるようになっただけなのである。これが、パリにある FRANCIS の入力現場をおとづれた際の実感である。

最近、わが国の地方自治体の美術館などにも、情報センターというものが作られつつある。しかし、どこでも、ハイテクを入れさえすれば、ものが動き出すという誤解が濃厚である。現実には、そうして導入された大型コンピューターは、大半の機能を生かしきれずにほこりをかぶっている。何か大きな錯覚があるといわざるをえないだろう。元来、学芸員をはじめとした人文系研究者がコンピューターの本質がわかろうはずがない。肝心なのは、筆者を含めたそうした研究者が、ライブラリアン、並びに高度電子技術者と一緒になって学び続けることである。そして、行政の資金、そして研究費の資金を投入すべき先は、そうした力のある人の養成と確保に向けるべきである。人文系研究者を、同時にいかに手職人として養成できるか、これが最も重要なことである。データ・ベースも人と手である。

— お詫び —

情報知識学会ニューズレター訂正箇所のお知らせ

情報知識学会ニューズレター、No.22 (1933.10.1)、掲載の米田幸夫先生の原稿「外国の固有名詞のカナ表記について」の6頁、下から7～4行目について筆者より下線のように訂正がございました。

このときは、表1、2のカナはなるべく使用しない。上の例では、Cannizzaro はカンニツザロ、Goethe はゴエト (th=t, e=無声)、Charles Boyer はカルレス (ch=k, l=r) ボイェル、Michel Boudart はミケル ブダルト (二重母音を認める)、Robert Reagan はロベルト レアガン (二重母音は認めない) となる。

詳細は下記住所にお問い合わせ下さい。

東海大学開発技術研究所、151 東京都渋谷区富ヶ谷 2-28-4.

Tel 03-3467-2211, FAX 03-3467-6177

1年ほど前のことだったと思うが、上野の博物館の展覧会場でハイビジョンを見る機会があった。天井の高い一室に折り畳み椅子がならべられ、15分ほどのプログラムがくりかえし上映されていた。特大のスクリーンの画質に思わず目を見張ったが、ちょうど映されていた正倉院の建物が正面向きにびたりと収まる画面が見慣れたテレビの画面よりかなり横長なのが気になった。

私の勤める研究所には長年にわたって蓄積された数万枚のガラス乾板とフィルムがある。美術史の研究用資料として美術品を撮影したもので、それをデジタル画像に移しかえる準備をいま進めている。が、ディスプレイの画面にはどうも馴染みきれないものがある。解像度の高い画像は驚くほどの精度だから問題は再現性ではない。画面への収まりがどうしても悪いのである。掛軸を例にあげると画面の縦横の比率が3対1以上になる場合がざらである。これでは左右に大きな余白ができてしまい、どんなに大きなディスプレイを使ってもその大きさが生きてこない。縦長のディスプレイを使えば少しは不満解消になるのだろうか？

よく考えてみるとコンピュータの出力する絵画に違和感をもつのは、私の専門分野が日本の絵画史だからかもしれない。近代以前の絵画をみると、絵巻、掛軸、屏風、襖、扇、画帖など画面の形式はじつに多様で、個々の形式はその絵画が制作される目的に適うように選択されている。鑑賞の場も今とちがいで、ずっと多様である。美術館の壁面に絵画をならべて鑑賞するのは近代になって生まれた制度だから、当然といえば当然なのだが、近代以前の絵画はこうした美術鑑賞の対象となることを前提にして作られていない。それを美術館の壁面にならべるとどうしても馴染めない側面が残ってしまう。無理矢理、近代絵画と同じように見ているのである。どうやら違和感はこのあたりに根があるらしい。

ブラウン管を使わない超薄型家庭用テレビの登場が最近になって伝えられている。テレビの究極的な目標は美術館の壁面にかけられた額縁絵画にあるのかもしれない（小学校高学年の課外見学で東芝の技術研究所に訪れたとき、君たちが大人になる頃は壁掛けテレビが出来ているよと説明を受けた記憶が筆者にはある）。だとすればテレビの画面は美術館で鑑賞する近代絵画をモデルにした視覚体験をあたえる装置なのだろう。

そこで思い当るのは書籍の版型である。この縦横比もディスプレイの比率とあまりかわらない。美術全集をひらいてみると、実物の絵画のもつ迫力の再現がいかにも難しいかよくわかる。最近の印刷技術が優秀なだけに図版レイアウトのまずさが目立つ。理由は簡単で、絵巻や屏風、掛軸という画面が紙面の縦横比に馴染まないからである。しかも部分を拡大して無理に収めようとするから、ますます実物を離れて異質な印象を読者にあたえる結果になる。ところが西洋絵画のタブローはびたりと収まるのである。額縁絵画と書籍がじっくり馴染むのは、両者の底流に共通する視覚文化の伝統があるからではあるまいか。

このように考えてくると、近代以前の絵画がディスプレイの画面に収まりにくいのは、たんに縦横の比率の問題なのではなく、特定の文化に内蔵された視覚をめぐる慣習にあるらしいのである。一定の枠に縁取りされた画面の向う側にもう一つの現実を見ようとする、そうした慣習である。そこに蓄積された経験と慣習の差が縦横の比率にも現われていると、逆に考えるべきだろう。

たかがディスプレイなどとはいえなくなる。こんなところにも視覚文化の伝統が顔を覗かせているように思うのである。テクノロジー以前の問題である。ハイビジョンの画面の縦横比は映画をモデルにしているらしい。それは、どんな新しい現実を私たちにもたらすのだろうか、少しばかり気になるのである。

参考図書としてのデータベース：一西洋美術史研究者の経験から

成城大学 講師 千速 敏男

◆ 美術史学におけるデータベースの普及：欧米の事例

ミュンヘンの中央美術史研究所 Zentralinstitut für Kunstgeschichte の月報 Kunstchronik の1990年12月号によれば、欧米で現在稼働中の美術史学関連のオンライン・データベースは、RILA, RAA, Art Index Online Database などの書誌データベースを中心に、12件あるという (Eduard Isphording. Kunst-historisch Relevante Datenbanken in den USA und Europa. Kunstchronik 43/12 (Dez. 1990) S. 655-668)。その主要なものを紹介しておきたい。

RILA (Art Literature International Database) は、J. Paul Getty Trust の支援を受けて、マサチューセッツ州にある Sterling and Francine Clark Art Institute が編纂したデータベースで、1975年より冊子体の抄録・索引誌 International Repertory of the Literary of Art を刊行する一方、1973年以降に刊行された美術史学文献の情報を DIALOG 上で提供していた。International と銘打っているものの、編纂母体がアメリカ合衆国にあることもあって、英語圏からの情報が偏重されるきらいがあったが、1990年より、下記の RAA が合流し、新たに BHA として稼働している。

この BHA (Bibliography of History of Art) は、国際美術史学会やユネスコの後援を得て、Metropolitan Museum of Art, Museum of Modern Art Library, Victoria and Albert Museum Library, Warburg Institute, Courtauld Institute of Art Library, Bibliothèque Nationale, Bibliothèque d'Art et d'Archéologie J. Doucet, Deutsches Bibliothek, Schweizerisches Institut für Kunstwissenschaft, Biblioteca Herziana, Kunsthistorisches Institut Florenz, Instituto Diego Velázquez など、欧米の主要(美術)図書館から情報提供を受ける文字通り international なものである。現在は、DIALOG 上で利用することができ、冊子体の抄録・索引誌 Bibliography of History of Art も1991年より刊行されている。

この BHA と合流した RAA (Répertoire d'Art et d'Archéologie) は、すでに1910年より刊行されている冊子体の抄録・索引誌 Répertoire d'Art et d'Archéologie を基礎にして、フランスの CNRS/INIST (Centre National de la Recherche Scientifique/ Institut de l'Information Scientifique: Sciences Humaines et Sociales) が編纂しているデータベースで、1973年以降に刊行された美術史学文献の情報を QUESTEL/FRANCIS-H 上で提供してきた。ヨーロッパ大陸からの情報に関しては定評があったが、現在もその独自性を保っており、QUESTEL 上で利用が可能である (木村三郎 フランスにおける美術考古学文献データベースについて: FRANCIS アクセスの実際: 西洋美術史研究の立場から、人文科学データベース研究 1 (Jun. 1988) p. 76-89 参照)。また、FRANCIS 上で提供されている人文社会科学関係記事の書誌データのうち、1984年から1991年までの分が、CD-Francis という題名の CD-Rom 版で刊行されており、それによっても美術史学文献を検索することが可能である (詳細は、アート・ドキュメンテーション通信 20 (Jan. 1994. 刊行予定) 参照)。

一方、Art Index Online Database は、ニューヨークの H. W. Wilson Company 社が、1929年より刊行している冊子体の索引誌 Art Index に基づくデータベースで、1984年以降の美術史学文献の情報を WILSONLINE file ART 上で提供している。情報の過半数が英語圏からのものだが、そのきめの細かさには定評がある。

また、オンライン・データベースではフランスに一步遅れをとっているドイツでも、AKL (Allgemeines Künstlerlexikon. München: K. G. Saur, 1992-) の CD-Rom 版の刊行が始まるとのことである (水谷長

志、美術参考図書と美術図書館・員：欧米の事例から（その一）、現代の眼〔東京国立近代美術館月報〕452（1992.7）p.8）。この AKL は、ライプツィヒの Seemann 社が1907年以来40年余りをかけて刊行した世界最大の美術家事典 *Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler von der Antike bis zur Gegenwart* 全37巻（編者 Ulrich Thieme と Felix Becker の名にちなんで、「ティエメ・ウント・ベッカー」と通称される）をふまえて、1983年から Seemann 社が刊行をはじめた巨大な美術家事典で、ドイツ統一後は、ミュンヘンの Saur 社がその事業を受け継いでいる。

◆ 参考図書としてのデータベース：人文科学の立場から

ふりかえって、「経済大国日本」ではどうなのだろう。大前巖氏によれば、世界のデータベースに占める日本の割合は、わずか2.3%過ぎないという（オンライン・データベース入門（ブルーバックス B-980）講談社、1993、p.37）。これはどうしたことなのだろうか。

考えてみると、前項で紹介した欧米のオンライン・データベースや CD-Rom データベースの由来をたどると、いずれも印刷媒体による参考図書として長い歴史をもち、評価を得てきたものであることがわかる。すなわち、データベースとは、実はコンピュータという媒体によって作りだされた参考図書なのである。

先日、あるコンピュータ工学の研究者の方とお話しする機会を得たおりに、「データベースが参考図書である、というイメージをどのくらいお持ちですか」というきわめてぶしつけな質問をしてみた。いささか答えにくい質問であったかと思うが、たいへん誠実なお答えを得た。それを筆者なりにまとめてみるならば、1) 自然科学系の分野では、データベースは、主としてこれから取り組む研究に関する先行例の有無の確認に用いられるため、過去数年分のデータがあれば充分であること、2) それゆえ、科学史のような特殊な分野をのぞけば、過去のデータの遡及入力にはさほど必要ではないこと、の二点になるかと思う。さらに、3) 日本の自然科学系の研究者は、海外の学術雑誌を主たる発表の場としているため、海外で編纂されるデータベースを利用すればそれで充分であり、国内で独自のデータベースを編纂する必要もさほどない、とのことであった。

このお答えを得たとき、自然科学と人文科学における研究活動の在り方のちがいをあらためて痛感した。人文科学の分野では、科学史のような特殊な分野のほうが一般的なのであって、「研究史（自分が取り組む研究に関するそれまでの研究過程）」こそ、なによりも最初に確実におさえておくべきものである。そして、事典などの参考図書は、こうした「研究史」を教えてくれる貴重な情報源なのだ（千速敏男、西洋美術史と参考図書、アート・ドキュメンテーション通信 11（Oct.1991）p.14-15 参照）。それゆえ、人文科学の研究者は、データベースにも同様のことを期待することになる。つまり、可能な限り、過去のデータが遡及入力されることが望ましい。人文科学の研究者たちがしばしばデータベースを冷やかな眼で見るというのも、過去のデータがあまりにも少ないことに起因している。この点が第一の相違であろう。

また、人文科学が研究対象とする「文化」が、時代・国（地域）、民族などによってその独自性が与えられてきたものである以上、いずれは世界的な視野のもとに統合されていくべきであるにせよ、参考図書は、それぞれの国（地域）や民族によって編纂されなければならないという宿命を背負っている。それゆえ、人文科学の研究者は、「国産」のデータベースを要求するのである。人文科学を学ぶ者としては、「国産」データベース2.3%はあまりにも淋しい。また、国際的に見れば、研究者としての責務を果たしていないともいえるだろう。

◆ データベース編纂を支援する参考図書：一西洋美術史研究者の経験から

では、人文科学において求められるデータベースはどのように編纂されるのだろうか。筆者は、国内におけるデータベース編纂に関わったことはない。しかし、ここ数年、美術事典の編纂に携わってきた。すでに、前項で述べたように、人文科学におけるデータベースとは参考図書と同じ性格をもつべきものであるのだから、筆者の経験を述べることも、多少は今後の人文科学におけるデータベースの編纂に役立つのではないか

と思う。

筆者が編纂に関わった事典は、来春、刊行予定の『西洋絵画作品名事典（仮）』（三省堂）で、ルネサンスから現代までの画家約630名を取り上げ、その主要作品20,000点余について、1) 作品の名称、2) 欧文による作品の名称、3) 制作年代、4) 素材・寸法、5) 所在地を記し、さらに重要な作品については解説を付したものである。その本文部分は、ただちにパーソナル・コンピュータによるカード型データベースに転用できるデータの集合といえよう（事実、筆者はワードプロセッサで執筆したのだが、その原稿を入力したテキスト・ファイルは、すでに個人的なデータベースとして自らの研究に大いに役立っている）。

事典編纂は、先行する様々な参考図書の支援を受けて行われる。たとえば、今回の事典における作品データは、信頼のおける作品総目録、美術事典、美術館所蔵作品目録といった参考図書にもとづいて収集された。これは自明のことだ。しかし、ここでは、表記統一の作業に話を絞って、先行する参考図書の支援の問題について筆者の経験を述べることにしたい。というのも、この問題がシソーラスと関係してくるからである。

西洋に関する事典の編纂の場合、執筆者間における訳語のずれが、つねについてまわる。たとえば、この画家は「ボッティチェリ」なのか、「ボッティチェリ」なのか、「ボッティチェリ」なのか。この主題は「東方三博士の礼拝」なのか、「三賢王の礼拝」なのか、「マギの礼拝」なのか。あるいは「ボイマンズ＝ファン・ブニンベン美術館」なのか、「ボイマンズ＝ファン・ブーニンヘン美術館」なのか、「ボイマンズ＝ファン・ボイニンゲン美術館」なのか。一見、どうでもよいような実にささいな問題である。しかしながら、こうした表記のずれは、読者に、たとえば「東方三博士の礼拝」と「マギの礼拝」は別の主題なのか、という混乱を与えることになる。これがデータベースであれば、検索の際に適切にデータが検索できないという結果を生じることになるだろう。それゆえ、たかが表記と軽く考えることもできないのである。

今回の事典の場合、幸い画家名と主題に関しては、『新潮世界美術辞典』（新潮社 1983年）、『オックスフォード西洋美術事典』（講談社 1989年）、『世界美術大事典』（小学館 1990-92年）、『西洋美術解説事典』（河出書房 1988年）といった定評のある事典がすでに刊行されているので、それらを参照して表記の統一をはかることができた。具体的には、これらの事典に決定した表記を書き込んでいったのである。

それに対して、美術館名については、まだ定評のある事典や便覧が刊行されていないため、表記統一の作業は困難をきわめた。今回の事典に出てきた美術館および所蔵者の名称は数千件におよび、とうてい一人の人間が記憶のみに頼って修正できる範囲ではなかったのである。試行錯誤の結果、パーソナル・コンピュータを利用して、すべての原稿の中から美術館名を抽出したデータベースをつくるしかない、ということになった。なんということはない。「絵画作品名」事典を編纂するために、「美術館名」事典を編纂したわけである。

シソーラスということがよく話題にされ、シソーラスがあれば、検索の際の言葉のずれは解決できます、ともてはやされている。しかし、人文科学の場合、シソーラスとは、以上に述べたように参考図書そのものなのである。しかも、それは種類の参考図書のみではすまない。今回の事典編纂を通じて、筆者が利用した参考図書の数は、表記統一の作業に絞っても数十点におよんだ。また、シソーラスの作成とは、結局のところ参考図書の編纂そのものなのである。そう簡単なことではない。今回の事典編纂を通じて、筆者は、そのことに痛感させられた。

欧米において人文科学のデータベースの作成が頻りに行われている背景には、それこそディドロ＝ダランベールの百科全書以来の、長い参考図書編纂のノウハウの蓄積があることを忘れてはならないだろう。日本では、図書館情報学の専門家といえば、図書館の司書をまず考えるが、実は、参考図書の編纂者も、すぐれて図書館情報学の専門家なのである。そして、データベースが参考図書であるとすれば、データベースを編纂するためには、それぞれの専門分野の研究者にくわえて、図書館情報学の専門家、メディア工学の専門家などが協力していかなければならないのだ。

Euro Call '93に参加して

明海大学外国語学部講師 渡辺雅仁

本年度のEuro Call（ヨーロッパ計算機支援語学教育学会）は英国Hull大学にて、9月15日から17日にかけて開催された。筆者は、今年度、情報知識学会にて研究発表した「英語例文データベースの基本システムの作成」中の自作プログラムをマイクロソフトVisual Basicにより、ユーザーインターフェイス部分を強化したWindows版に改変し、これをソフトウェア・デモンストレーションの部会にて発表した。本稿ではこの大会の概要とコンピューターを利用した語学教育の最前線についてレポートしたい。

大会にはヨーロッパの全領域、30数ヶ国から300人を越える参加があった。参加者も大学教員に留まらず、中学、高校、語学センターの教員、ソフトウェア開発業者など多彩であった。スイスより自動車を利用し30時間かけて参加した高校教員もいて、欧州共同体としてのまとまりに驚かされる。このまとまりが、語学教育のレベルの高さへとつながっているのだろう。

大会は、Emancipation Through Learning Technology（学習科学技術による解放）をテーマに、「自律および遠隔操作による学習」、「マルチメディア」、「学習のための手段や道具」、「評価と査定」、「全体の統合」という5つのペーパーセッションと、これに並行して行われる複数の「ソフトウェア・デモンストレーション」から成り立つ。扱われる言語も当然のことながら、英語に限られず、独、仏、伊、西など多様であった。日本語教育に関する発表も一つあり、日本語への関心の高まりを感じることができた。

CALL（Computer Assisted Language Learning）では、コミュニケーションが排除され、単純なボタンクリックへと陥りやすい、という伝統的な批判が論ぜられ、これに対し、機械と教員の援助の統合や、機械を利用する学習者間のコミュニケーションによってこの問題を克服する、という従来通りの提言が行われる。機械のみでコミュニケーション能力を養成する、という根元的な問題はさらに当分の間、未解決のままであることだろう。

しかし、一つ一つの実践は技術革新によって確実にその厚みを増している。音声・画像・文字の情報を有機的に統合したマルチメディア教材は、決して目新しいものではないが、ハイパーカードを利用したマッキントッシュやWindows 3.1により、マルチメディア環境は底辺を広げた。また、最新の情報機器を用いない、従来の文字主体のCALL教材であっても、Correct/Wrongの2者択一的なレスポンスの与え方から、学習者の答えを詳細に分析し、それに応じて複数のレスポンスを与えることができるようプログラム化しているものが目立った。過去の教材のノウハウの蓄積されていればこそその進歩である。

日本へは欧州で作成されたCALL教材がなかなか流入してこないのが現状である。しかし、マッキントッシュとWindowsの拡大によって、この状況が少しでも変化することを期待したい。

「1994年情報学シンポジウム」開催について

— マルチメディアと情報システム —

日 時 1994年1月12日(水)～13日(木) 9:00～17:10
 場 所 日本学術会議講堂 〒106 港区六本木 7-22-34
 (地下鉄千代田線, 乃木坂駅下車)
 共同主催 (予定) 日本学術会議 情報学研究連絡委員会
 学術文献情報研究連絡委員会
 学術データ情報研究連絡委員会
 情報工学研究連絡委員会
 情報処理学会, 人工知能学会, 日本医学会, 日本化学会, 日本数学会,
 日本地理学会, 日本物理学会, 情報知識学会, 日本生物物理学会
 後 援 (予定) 学術情報センター, 計測自動制御学会, 国際電信電話¹,
 情報科学技術協会, 情報通信学会, 電子情報通信学会, 日本医療情報
 学会, 日本科学技術情報センター, 日本機械学会, 日本金属学会,
 日本原子力学会, 日本材料科学会, 日本材料学会, 日本生化学会,
 日本電信電話², 日本動物学会, 日本農学会, 日本分子生物学会, 日本
 分析化学会, 日本薬学会, 化学情報協会, I C O T
 申込締切 1993年12月20日(月) 当日受付も歓迎しますが, 資料不足の際は事前登録
 者を優先します。
 参加費 (資料代として) 共催学協会員 7,000円, 学生 2,000円, 一般10,000円
 懇親会費 一律 3,000円
 ※当日出席できない方のために資料の郵送申込も受け付けております。
 申込先 (社) 情報処理学会 情報学シンポジウム係
 〒160 東京都新宿区西新宿 1-24-1 エステック情報ビル27階
 Tel. (03)5322-3535 Fax.(03)5322-3534

~~~~プログラム~~~~

第1日目 1月12日(水)
 組織委員長挨拶(9:00～9:10) 尾関 雅則(日本学術会議情報学研究連絡委員会委員長)
 セッション1 (招待講演1)(9:10～9:50)
 座長: 細野 公男(情報学シンポジウム'94 プログラム委員長, 慶大)
 情報から見たマルチメディアと情報システム 藤原 譲(筑波大)
 休憩(9:50～10:00)
 セッション2 情報システムへの要件(10:00～12:05) 座長: 尹 博道(富士通)
 情報システムの社会的条件 山崎 久道(三菱総研)
 マルチメディアを利用した新しい医療の可能性について 海野 一則(メディカルデザイン)
 マルチメディア材料データベースシステムKINDの構築と運用
 川添 良幸, 大野かおる, 余 京智, 中名生 充, 秋山 庸子, 伊藤 敏行, 和田 繁男,
 森 倫子(東北大)
 土偶資料情報化研究と歴史資料情報の諸問題 八重樫純樹(国立歴史民俗博物館)
 複数の情報メディアにおける同一の科学情報の伝達: その同一性と差異
 武者小路澄子, 野添 篤毅(情報大学)
 昼食(12:05～13:00)
 セッション3 (招待講演2)(13:00～14:20) 座長: 阿部 英次(豊橋技科大)
 現代における情報システムの役割 三森 定道(日立)
 メディアの融合の視点から見たインタラクティブメディア 金村 公一(日本システム開発研究所)
 休憩(14:20～14:30)
 セッション4 基盤的概念(14:30～15:45) 座長: 有川 節夫(九大)
 「かたち」と「ことば」 島尾 新(東京文化財研究所)

- 「史料」(歴史資料)と歴史的思考
多様性情報処理機構としての自然システムの基礎ー複雑適応システムの評価問題ー
永村 真(日本女子大)
米澤 保雄(愛知技短大)
- 休憩(15:45~15:55)
- セッション5 モデリング, 自己組織化(15:55~17:10) 座長: 中川 優(NTT)
協調活動のフレームワークにおける自己組織化の考察
ー自己組織化を促進させるシステムモデルの提案ー
江谷 典子(富士ゼロックス情報システム)
クラス定義空間の多重化機能を持つオブジェクト指向マルチメディアプラットフォーム
前畑 淳也, 碓崎 賢一(九工大)
材料データシステムにおけるハイパーメディア化
岩田 修一, 河西 寛, 岩井 岳夫, 久保田晃弘(東大)
- 第2日目 1月13日(木)
- セッション6 (招待講演3)(9:00~9:40) 座長: 八重樫純樹(国立歴史民俗博物館)
芸術と工学 久保田晃弘(東大)
- 休憩(9:40~9:50)
- セッション7 応用システム(9:50~11:55) 座長: 千村 浩靖(NEC)
ハイパーフレームを用いた知的マルチメディアCAIの開発
富士 隆, 谷川 健, 星原健二郎, 藤井 誠,
小銭 正尚(学習情報通信システム研究所), 三枝 武男(北海道情報大)
図を対話メディアとする発想支援システムD-ABDUCTOR三末 和男, 杉山 公造(富士通研)
マルチメディア・コンピュータ・テスト・システム 永岡 慶三(神戸大)
パーソナルなデジタル映像制作システム「Video Power Tools」 飯島 泰裕(富士通研)
CSCWフレームワークの開発と公共分野の企画調整業務への応用
長谷川 保, 沼上 英雄, 澤田 順夫, 阿久津正明, 村永 哲郎(東芝)
昼食(11:55~12:50)
- セッション8 (招待講演4)(12:50~14:10) 座長: 石塚 英弘(情報大)
マルチメディアと著作権(仮題) 名和小太郎(新潟大)
マルチメディア通信サービス 栗原 定見(NTT)
- 休憩(14:10~14:20)
- セッション9 利用者インタフェース(14:20~15:35) 座長: 澤田 順夫(東芝)
3次元オブジェクトの機能合成システムー幾何情報を扱うための機能部品の提供ー
岡田 義広, 田中 譲(北大)
フォーム・フロー・アーキテクチャ
ーアクティブな書類を用いた企業システムの統合アーキテクチャー
中川 光紀, 田中 譲(北大)
フレーム関係軸モデルに基づく情報群の自動組織化と視覚的ブラウジング
増田 佳弘, 植田 学, 石飛 康浩(富士ゼロックス)
- 休憩(15:35~15:45)
- セッション10 基本方式, 処理技術(15:45~17:00) 座長: 中谷多哉子(富士ゼロックス情報システム)
Xウィンドウシステムのマルチメディア拡張 山本 英治, 碓崎 賢一(九工大)
ADPCM 直接分割・結合方式の音声エディタへの適用
守屋 俊夫, 里山 元章, 米澤 恵, 柳 邦宏, 和歌森文男(日立)
知的作業支援基盤としての映像データベース
有澤 博, 由井 仁, 富井 尚志(横浜国大)
- 総括(17:00~17:10) 田中 和明(情報学シンポジウム'94 実行委員長, 日立)

学会カレンダー(Ver. 6.0, '93)

1993年12月1日～2日	KB&KS '93 大規模知識ベースの構築と共有に関する国際会議 京王プラザホテル Contact: アイ・エヌ・エス (株) コンベンション事業部 Tel:03(3494)1869
1993年12月2日～4日	Colloquium on Musical Informatics. Milan, Italy. Contact: Comitato Organizzatore del X Colloquio di Informatica Musicale, c/o L.I.M.-Laboratorio di Informatica Musicale, Dipartimento di Scienze dell'Informazione, Università degli Studi di Milano, via Comelico, 35, I-20135 Milano, Italy. Phone:+39 25 5006.338/382/380 (answering machine), Fax: +39 2 55006.373. E-mail: maclim@hermes.mc.dsi.unimi.it
1993年12月6日～11日	2nd International Conference on Arabic and Advanced Computer Technology. Casablanca, Morocco. Contact: King Abdul-Aziz Al-Saoud Foundation for Islamic Studies and Human Science, P.O. Box 12585, Bd. de la Corniche, Ain Diab, Casablanca, Morocco. Phone: (212-2) 39-10-27 or (212-2) 39-10-30, Fax: (212-2) 39-10-31
1993年12月8日～10日	第24回画像工学コンファレンス ABC会館ホール(東京) Contact: 第24回画像工学コンファレンス事務局 〒105東京都港区浜松町2-12-14 第2日化ビル連企画気付 Tel:03(3433)2543 Fax:03(3433)3904
1993年12月21日	データベースにおける変革 理化学研究所 Contact: 理化学研究所ライフサイエンス研究情報室 Fax:048(462)4618
1994年1月18日～19日	1994 情報学シンポジウム 日本学術会議 Contact: 日本情報処理学会 情報学シンポジウム係 Tel:03(5322)3535
1994年3月14日～18日	CALICO '94 Annual Symposium. Flagstaff, Arizona, U.S.A. "Human Factors: Screen Design, Ergonomics, Aesthetics, Human-Computer Interface." Contact: CALICO, 014 Language Center, Duke University, Box 90267, Durham, NC 27708-0267. Phone: 919/681-6455, Fax: 919/681-6485. E-mail: calico@dukemvs.bitnet or calico@dukemvs.ac.duke.edu
1994年3月23日～25日	2nd Southern African Conference on Multimedia and - Hypermedia. University of Pretoria, South Africa. Contact: The Conference Secretariat, Hypermedia '94, c/o Dept. of Information Science, University of Pretoria, P.O. Box 32342, 0010 Glenstantia, South Africa. Phone: +27 (0)12 998-9002, Fax: +27 (0)12 43-2185. E-mail: bothma@libarts.up.ac.za
1994年3月24日～27日	CAA94, Glasgow University, Scotland. Contact: Jeremy Huggett, Department of Archaeology, Glasgow University, Glasgow, Scotland.
1994年8月5日～9日	COLING 94, Miyako Hotel, Kyoto, Japan Contact: COLING 94, Department of Computer Science, University of Sheffield, Sheffield S10 2UH, England E-mail: coling@dcs.sheffield.ac.uk



論文募集

第47回 F I D 国際会議

1994年10月2～9日

テーマ Finding New Values and Uses of Information

国際情報ドキュメンテーション連盟 (International Federation for Information and Documentation: F I D) は自然科学、社会科学および人文科学など全ての分野でのドキュメンテーション、情報学、情報管理などの研究・開発をはかる国際機関で、隔年に国際会議を開いてきました。

この度 FID 創立100 周年を記念し、来年10月に東京で開催されることになりました。ハードウェア技術の進歩に比べ、ソフトウェアとくにデータベースの研究開発が立ち遅れている世界の趨勢の中にあって、21世紀を展望しながら標記のテーマを掲げての日本での国際会議に、全世界の科学者・研究者の大きな関心と期待が寄せられています。どうぞ奮って研究発表にご応募ください。

- 会議の名称：第47回国際情報ドキュメンテーション連盟総会国際会議
The 47th General Assembly of the International Federation for Information and Documentation
- 主催：日本学術会議 情報処理学会 情報科学技術協会 情報知識学会
後援 (予定)：文部省 通商産業省 科学技術庁 国立国会図書館
学術情報センター 日本科学技術情報センター
協賛 (予定)：化学情報協会ほか18学協会
- 開催時期：1994年10月2日～10月9日 (8日間)
- 開催場所：大宮ソニックシティ (大宮市桜木町 1-7-5)
- 組織委員長 藤原鎮男 (東大名誉教授) 運営委員長 藤原 譲 (筑波大教授)

◎ 論文募集

プログラム委員長 細野公男 (慶大教授)

Subject

1. Fundamental Theory of Information
2. Information Science of Classification and Terminology
3. Development of New Media and Multi Media
4. Advanced Information Technology
5. Novel Paradigm of Information Systems
6. Business, Finance and Industrial Information
7. Information Transfer, Standard, Copy Right
8. Training and Education
9. Information Policy

~~~~~ スケジュール ~~~~~  
論文〆切 1994年2月15日  
著者への採否通知 4月15日  
最終原稿提出〆切 6月15日  
~~~~~

論文の記述方法

- ・ A4 またはレターサイズに英語でダブルスペースでタイプすること
- ・ 論文の長さは、演題等を含めて6～12ページとすること
- ・ 論文には演題、氏名、住所、電話番号を明記すること
- ・ オリジナル論文にコピー3部を添えること

論文の提出および問合わせ先

〒103 東京都中央区日本橋2-14-8 加商ビル
(株) アイシーエス企画
第47回 FID 国際会議
☎ 03(3272)7981 Fax 03(3273)2445

研究集会「歴史研究と電算機利用」に参加して

日本女子大学大学院 高山有紀

平成5年9月18・19日（土・日）両日、情報知識学会主催の研究集会「歴史研究と電算機利用」が、池袋の駿台電子情報専門学校において開催された。二日間にわたり七氏からの報告があり、また47名の方々が参加されなかなかの盛況であった。筆者は一昨年の研究集会に参加し、今回は報告の機会を得たわけであるが、各氏の報告内容の概要と感想を、理解できる範囲で述べさせていだきたい。

「開会挨拶」 藤原鎮男氏（情報知識学会会長、国文学研究資料館）

まず研究集会の主催者を代表者である情報知識学会の藤原鎮男会長から、文科系諸科学と情報科学との接点を求めて開催される本集会の目的とその成果への期待が述べられた。

「基調報告」 安澤秀一氏（情報知識学会副会長、駿河台大学）

研究集会開催に尽力された安澤秀一氏から、ヨーロッパの高等教育と情報処理の実態をめぐり、特にイギリスの歴史教育におけるコンピュータ利用の実例とともに、自然言語とシソーラス、アーカイブスの現状について興味深い報告がなされた。さらに日本における活用事例として、宇和島藩城下における階層別人口構成のデータ処理の成果が示された。

「美術史研究文献のドキュメンテーション」 千速敏男氏（成城大学）

報告者の千速氏は、日常的にワープロを携帯しあらゆる研究情報を蓄積・活用されており、この経験とアート・ドキュメンテーション研究会の活動にもとづいた、西洋美術史におけるコンピュータ利用の現状と有効な利用範囲、美術研究におけるモニタの再現能力やイメージ検索の困難さなど具体的な問題点についての報告は説得力に富むものであった。

「文字列・画像データベースシステム仕様と開発」 永村眞氏（日本女子大学）

日本史分野における史料データベース構築

にあたり不可欠とされる基本仕様が明示されるとともに、大量の史料情報の処理・活用のため採用されたデータ形式による機能的な制約を克服するための文字列・画像データベースの有効性が提示された。

「文字列・画像データベースシステムの概要とデモンストレーション」 大槻豊寛氏（内外エレクトロニクス）

永村報告の提言をうけて開発された文字列・画像統合データベース処理システムについて、その基本仕様と具体的な機能に関する報告とデモンストレーションがなされ、利用者の立場から様々な質問がなされた。

「醍醐寺史料データベース構築について」 高山有紀（日本女子大学大学院）

醍醐寺史料データベース構築作業に携わる立場から、日本史史料の不定形な漢字文字列を処理するためには、可変長処理とマルチヴァリューが不可欠の機能であることを強調した。また本データベース構築作業における、作業者からの様々な問題点について言及した。

「MARC（AMC）と史料館の史料所在データベース」 山田哲好氏（国文学研究資料館・史料館）

史料情報の処理に有効なシステムとして、アメリカのMARCフォーマットの概要紹介が行われ、次に国文学研究資料館・史料館の史料所在データベース作成作業の現状と課題が報告された。同史料館では、入力作業を業者に委託しており、その成果について質問が出る場面もみられた。さらに山田氏は、ネットワークによる広範なデータ活用の必要性和、そのために不可欠な基礎的データの記述方法について提案がなされた。

「多摩市史編纂における情報機器の利用について」 針谷武志氏（多摩市史編纂室）

市史編纂の現場におけるコンピュータ利用の合理化と省力化についての報告を交えながら、史料調査の様子が収められたビデオをみ

る形態で報告はすすめられた。より正確な現状記録の方法として、ビデオ撮影を導入している点が特に注目された。

全体討論

以上の七報告を終えて、特に共通する問題点のいくつかが討論の素材となった。報告中でも話題とされた情報科学研究者の人文情報処理への関わりについては、参加された情報科学専門家の提言もあり、両者の接点をどのようにもてばよいのかというかなり具体的な議論が重ねられた。またシソーラスの有効性に対する意見や、情報作成者の意図への配慮といった、日頃現場で直面する様々な問題に関する意見が交換され、短時間ではあったが、一昨年の研究集会より以上に活発な討論がなされた。

筆者は日本教育史の立場から中世寺院社会

の研究に取り組む大学院生であるが、一方であしかけ6年にわたり醍醐寺史料のデータベース構築作業に関与してきた。筆者にとって研究とコンピュータは直接に関係するものではなく、構築作業はあくまで「仕事」という意識をもってきた。また周囲の大学院生を見渡してみても、パソコン愛好者は多いものの、歴史研究に導入し活用しているという話はほとんど聞いたことがない。二度の研究集会に参加して、改めてコンピュータが身近なものになっており、自らの研究に取り入れることが可能であることを実感することができた。しかし「大学院生のためのワークショップ」という主旨の割には、大学院生の参加は決して多いとはいえず、これは非常に残念なことであり、今後はできる限り周辺に呼びかけを行っていきたいと考えている。



情報知識学会通信

情報知識学会に入会を御希望の方は、このフォームをコピーして必要事項を御記入の上、事務局に郵送、又はFaxでお送り下さい。折返し入会案内、入会申込書等の書類をお送り致します。（現在入会金は1,000円、年会費は5,000円です。）なお現在ニューズレターがあります。御希望の方はお知らせ下さい。

Fax: 03 (3835) 0824

〒110 東京都台東区台東1丁目5番1号（凸版印刷内）

情報知識学会事務局 担当 五所 行

情報知識学会に入会したいので必要な書類をお送り下さい。

個人用 法人用 （どちらかを丸で囲んでください）

住 所: 〒

(フリガナ)
氏 名:

電 話:

Fax:

HCI Bibliography Project の紹介

Giovanni M. da Z ama

1 はじめに — プロジェクトの概要

The HCI Bibliography(以下、HCIB と略する¹⁾) はヒューマン・コンピュータ・インタラクション (HCI)²⁾に関するフリーアクセスなオンライン文献データベースである。このプロジェクトの基本的な目的は、HCI の研究者・開発者・教育者・学生に Anonymous FTP³⁾・電子メール・Macintosh フロッピーディスク・DOS フロッピーディスクを介して HCI 全般にわたる電子文献データを供給することにある。1993 年 7 月の時点で、13 ヶ国からの 100 人以上のボランティアの努力により、HCIB には 8200 項目以上が登録され、そのサイズは 9 メガバイトを越えており、23 ヶ国の 300 以上のサイトから利用されている。本稿では、HCIB の登録内容およびアクセス方法について紹介し、さらに、その成功の鍵となったと思われる「環境」についても言及する。

2 HCIB の登録内容

HCIB の各項目は、基本的に題名・著者・発行年月日・ページ数・発行元から構成され、可能なものについてはキーワードと梗概も登録されており、さらには、その文献の目次も登録されている場合もある。大規模編書⁴⁾・会議予稿集・学術雑誌各年号を単位として、項目はモジュールに分割されている。また、HCIB は、著書・編書・レポート・ビデオ・その他の参照情報もいくらか含んでいる。表 1 および表 2 は、それぞれ、HCIB がカバーする学術雑誌および会議である。表には、データを自由に配布する許可をこのプロジェクトに与えた出版社も記した。各項目は ASCII 文字を用いた UNIX refer format で配布されるので、人間にも可読であり、Macintosh や DOS の EndNote のような文献管理システム用に交換可能である。

3 HCIB へのアクセス方法

本質的には、HCIB はデータベースであり、オンラインサービスではない。HCIB プロジェクトでは彼らの計算機上のファイルを検索する方法を提供していないし、これからもその計画はない。そこで、HCIB を利用するためには、利用したい者が、ファイルを自分の計算機上にコピーし、自分でツール⁵⁾を用意して、自分の計算機上で検索しなければならない。しかしながら、あくまで何百というユーザのためのサポートはプロジェクトの範囲外であると明言しつつ、HCIB プロジェクトは HCIB へのアクセスのためのソフトウェア・ツールを開発している。HCIB のコピーを得るためには以下の 3 通りの方法がある。

モジュール名	雑誌名	出版元	号数	発行年
BIT	Behaviour & Info. Tech.	Taylor & Francis	1-11	1982-92
HCI	Human-Computer Interaction	Erlbaum	1-7	1985-92
HYPER	Hypermedia	Taylor Graham	1-3	1989-91
IESW	IEEE Software	IEEE	4-9	1987-92
IJHCI	Intl. Journal of Human-Computer Interaction	Ablex	1-4	1989-92
IJMMS	Intl. Journal of Man-Machine Studies	Academic Press	1-37	1969-92
IWC	Interacting with Computers	Butterworth-Heinemann	1-4	1989-92
JOC	Journal of Organizational Computing	Ablex	1-2	1991-92
SIGCHI	SIGCHI Bulletin	ACM	19-24	1988-92
TOG	Transactions on Graphics	ACM	5-11	1986-92
TOIS	Transactions on (Office) Information Systems	ACM	1-10	1982-92

表 1: HCIB に登録されている学術雑誌

- Anonymous FTP によるアクセス。
- 電子メールサービスを利用したアクセス。
- フロッピーディスクを介したアクセス。

¹⁾ この略称は本稿の筆者が本稿のために勝手に創作したものであり、一般的なものではない。

²⁾ 昔はマン・マシン・インタフェース (MMI) と呼ばれていたが、'man' のみを使うのが男女差別ではないかという反省のもとに、このごろは 'human' を使った 'HCI' がこの分野における常識になりつつある。

³⁾ File Transfer Protocol の略。Internet で標準的に使われているファイル転送プロトコル。

⁴⁾ 例えば、Baecker と Buxton の "Readings in HCI" (1987) や Salvendy の "Handbook of Human Factors" (1987) や Helander の "Handbook of HCI" (1988) など。

⁵⁾ このようなツールとしては、refer や WAIS や gopher などがある。

モジュール名	会議名	出版元	発行年
BCSHCI	BCS People and Computers	Cambridge	1985-92
CHI	Human Factors in Computing Systems	ACM	1982-93
CQL	Computers and the Quality of Life	ACM	1990
CSCW	Computer-Supported Cooperative Work	ACM	1988,90,92
DPS	Document Processing Systems	ACM	1988
DOC	International Conf. Systems Documentation	ACM	1985,88-92
ECHT	European Conference on Hypertext	Cambridge, ACM	1990,92
EP	Electronic Publishing	Cambridge	1990
ESP	Empirical Studies of Programmers	Ablex	1986,87,91
EWHCI	East-West International HCI	ICSTI	1992
HCI	HCI International	Elsevier	1989,91
HFS	Human Factors Society Annual Meeting	HFS	1987-92
HYPER	Hypertext Conference	ACM	1987,89,91
HYPUK	Hypertext I and II	Intellect	1988,89
HYSTAN	Hypertext Standardization Workshop	NIST	1990
INT	IFIP INTERACT HCI Conference	Elsevier/North-Holland	1984,87,90
IR	Information Retrieval	ACM	1986-92
IWIUI	International Workshop on Intelligent User Interfaces	ACM	1993
MOSHCI	Moscow International HCI	ICSTI	1991
OCS	Organizational Computing Systems	ACM	1991
OIS	Office Automation/Information Systems	ACM	1982,84,86,88,90
OZCHI	Australian Computer-Human Interaction	Aus. Ergonomics Soc.	1992
UIST	User Interface Software and Technology	ACM	1986,88-92

表 2: HCIB に登録されている会議予稿集

\$ mkdir mybib	# コピーを置くためのディレクトリの作成。
\$ cd mybib	# そのディレクトリに行く。
\$ ftp archive.cis.ohio-state.edu	# FTP の起動。
Name (...): anonymous	# ログイン名の入力。
Password: メールアドレス	# パスワードの入力。
ftp> cd pub/hcibib	# HCIB ディレクトリに行く。
ftp> dir	# ディレクトリの内容を表示。
ftp> get README	# ファイル README を入手。
ftp> prompt	# プロンプトの消去。
ftp> mget *	# 全てのファイルの入手。
ftp> quit	# FTP の終了。
\$	

図 1: FTP の使用例

3.1 Internet / Anonymous FTP アクセス

HCIB のファイルにアクセスするために、Internet ユーザは FTP を使いファイルとプログラムを自分の計算機上にコピーできる。アーカイブマシンへログインするときは、ログイン名として anonymous を、パスワードとしてアクセスする人の internet account(つまり、メールアドレス)を、それぞれ、用いる。FTP のメッセージは信じ難いほど「暗号的」で、多くのユーザは正常を告げるフィードバックメッセージと異常を告げるエラーメッセージを区別できないかもしれない。そこで、FTP からのメッセージはいっさい無視し、信ずる道を一步步つ進んで欲しい。図??に FTP によるアクセスの例を示すが、FTP からのメッセージはほとんど省略した。例の中では、\$はシステムが出すプロンプトを、#に続くテキストは説明のためのコメントを、ftp>は FTP のプロンプトを、下線を引いた文字列はユーザの入力を、それぞれ、表している。

ファイル転送のスピードは環境によって様々であるので、最初は小さなファイルで試してみるべきであろう。ファイルの内容に関する詳しい情報や出版者へのコンタクトの取り方などを含んだファイル README が存在するので、まず最初はそれにアクセスすることを筆者は推奨する。残念なことに、HCIB プロジェクトは仕事のオーバーヘッドを避けるために、圧縮したデータへのネットワークアクセスを提供する計画はないそうである。後述するフロッピーディスクによる配布を通してのみ圧縮したデータを入手することができる。

⁶ Send の後のコロンを忘れないこと、および、メイルにシグニチャを入れないことに注意!!

⁷ 例えば、Send: IJHMS* とか Send: IJHFS*.bib とか Send: IJHCI* IJHCI* IWC* IBIT* など。

⁸ 例えば、今年 (1993 年) ならば 4 枚、来年 (1994 年) ならば 5 枚、再来年ならば 6 枚。

⁹ The Association for Computing Machinery Special Interest Group on Computer-Human Interaction の略。

¹⁰ つまり、報酬なし。

3.2 電子メールサービス

HCIB は自動電子メールサービスによってアクセスすることが可能である。このメールサービスを使うためには、特有の定型メッセージを特定のアドレス (hcibib@cis.ohio-state.edu) に送ればよい。すると、自動的に返事を作成して送り返してくれる。最初は、メール本体に、

Send: index

のみを書いて、上記アドレスに送る⁶。すると、HCIB の索引が入ったファイル index が自動的に送られてくる。このように、Send: の後にファイル名を書いて、ファイル入手する。ファイル名としては、最初入手したファイル index の中に書いてあるものを利用する。ファイル名の指定に際しては、UNIX や DOS の標準的なワイルドカードが使えるので、複数のファイルを一度に入手できる⁷。Send: *を送れば、もちろん、全てのファイル入手できるが、膨大な量のファイルが自動的に送られ、ファイルシステムから溢れてしまう危険性があるので、得策とはいえない。

3.3 フロッピーディスク配布

Internet 経由の FTP でも電子メールでもアクセスできないユーザは、Macintosh または DOS の圧縮したファイルの入ったフロッピーディスクを入手できる。欲しい人は、(1) 返信用に住所を書いた前納郵便封筒と (2) Macintosh 形式または DOS 形式でフォーマットされたフロッピーディスクを送らねばならない。送るフロッピーディスクの枚数としては、HD フロッピーディスクで数えて、1990 年からの年数を目安とする⁸。DOS ディスケットのフォーマットとしては、360K フロッピーディスク以外はどれでも扱ってくれるようだ。郵送先は、The HCI Bibliography Project, Computer Science, Ohio State University Columbus, OH 43210-1277, USA である。前納郵便による返送しか許されていないのは不便かもしれないが、プロジェクトの仕事量を最小限に押えるための工夫と理解して欲しい。なお、配達には約 6~8 週間を要する。

4 おわりに - プロジェクトを支える環境

オハイオ州立大学の計算機情報学科の中にある HCIB プロジェクトは、もちろんオハイオ州立大学から「一部分は」援助を受けているが、その他にも多くの援助を得られたので成功したと考えられる。例えば、プロジェクトの組織面では ACM SIGCHI⁹ の援助を受けているし、設備面では Apple Computer 社による Macintosh IIci と Caere 社によるスキヤナおよび OCR ソフトの寄付が貢献している。また、出版社の協力も大きく、著作権に関する許可を与え、データ入力のために出版物そのものを寄附している。さらには、項目のチェックを行なった 100 人を越すボランティア¹⁰ の努力も重要だった。

様々な角度から、様々な人々が、この HCIB プロジェクトを支えている。「日本人が『単一民族国家だから連体感がある』と自負しているのだったら、こんなことは朝飯前でなきゃね」と思う筆者であった。

参考文献

本稿を執筆するにあたり、オハイオ州立大学の Gary Perlman 氏が alt.hypertext と comp.sys.mac.hypercard のニュースグループに投稿した HCIB に関するドキュメントを参照した。

編集後記

コンピューターの高度ユーザーは、地球のどこにでもいる時代で、また、今の世の中、コンピューター・フリックと呼ばれる、パソコン気違いも、どこに潜んでいるのかわからないご時勢です。パソコン通信の NIFTY-SERVE を愛用しているものとしては、モニター上に登場される様々なメールに現われる人間模様を眺めるたびにそう思う。このニュース・レターも、情報知識学と呼ばれるものがあるとするならば、この領域に関心をもたれる、地球上といえは少し大げさかもしれないが、日本のどこに隠れておられるかもしれない会員の（時に、非会員の）、そうした英知が交錯する場となれば良いと願います。編集委員が増えれば、人的、そして学際的ネット・ワークもそれに比例して大きく広がるわけで、喜ばしいことです。かくいう私も、ニュース・レターの編集委員を最近仰せつかった一人ですが、まずは御挨拶とともに、実は今回もまた、編集の大半をご処理いただいた長瀬女史の御尽力に深く感謝します。

木村 三郎